

氏名	宮津 大輔		
ヨミガナ	ミヤツ ダイスケ		
学位の種類	博士（学術）		
学位記番号	博国第6号		
学位授与年月日	令和5年3月27日		
学位論文等題目	芸術性と産業化の拮抗・併存が生む製陶の新規性と発展について ―小森忍の事例を中心に―		
論文等審査委員			
（主査）	東京藝術大学	教授	（国際芸術創造研究科） 長谷川 祐子
（主査）	東京藝術大学	教授	（国際芸術創造研究科） 毛利 嘉孝
（副査）	東京藝術大学	准教授	（国際芸術創造研究科） 清水 知子
（副査）	国立工芸館	館長	唐澤 昌弘

（論文内容の要旨）

本論文では、長い歴史を有しながら、21世紀まで発展し続けている京焼における新規性を、作陶技術や芸術、美学的な視点のみならず、産業としての経営学的な視点や市場形成、更には社会情勢から考察・研究したものである。

明治維新に伴う東京遷都と急速な近代化に伴う西洋文化偏重の世情は、京焼に大きなダメージを与えた。しかし、欧米への積極的な販路開拓や碍子をはじめとする理化学陶磁器への業態転換によって未曾有の危機を脱する。1896年に設立された京都市立陶磁器試験場は、従来の徒弟制度から脱却した化学的アプローチによる技術研究で、陶芸と窯業における京焼の近代化を支えると共に、小森忍や河井寛次郎らの人材輩出・育成においても大きく寄与した。

第1部では、京都市立陶磁器試験場と満州における中国倣古陶磁器焼成を中心とした小森の活動に焦点を当て、同時に背景である満鉄中央試験所が有する自由闊達な気風や、新しい美術品市場である「鑑賞陶器/陶磁器」の誕生などについても論じる。続く、第2部ではライフスタイルや消費活動の変化に伴い、小森が手掛けた皇族・華族の邸宅から百貨店、そしてビヤホールといった空間の建築内装、更には西洋食器の東洋化と大量生産を通じ、本論文の核心である芸術と産業の拮抗・併存をもたらす新規性と発展について迫る。小森の類例を見ないダイナミックな活動を縦糸に、民芸運動やニューセラミックの黎明といった動向を横糸として考察を進めると共に、工芸という領域再考への新たな視座獲得を目指していくものである。更には、当時の経済・社会状況や時代精神に鑑みながら、小森の作風及び事業領域変遷について詳らかにすることで、未だ十分とは言い難い彼の業績を再評価することも本論文の副次的な目的である。

以上のような小森の事例を踏まえた上で、陶芸・窯業両領域に跨る広義の京焼における継続的進化・発展要因から、京都という地が有する伝統と革新における二項動態が生み出す独自優位性についても明らかにする。本論文は、従来の規範的工芸史とは異なり、政治並びに社会的文脈と深く結びついたオルタナティブな陶芸・窯業史観を示すものである。

（総合審査結果の要旨）

宮津大輔の研究論文「芸術性と産業化の拮抗・併存が生む製陶の新規性と発展について―小森忍の事例を中心に」は、先行研究の少ない小森忍を対象として、戦前、戦後にかけての日本の窯業と陶芸の双方の発展にかかわった小森の活動を、従来の工芸史を超えた視点で検証しようとしたものである。小森は陶芸家、

窯業技術者、経営者として、戦前は京都、満州、戦後は瀬戸、北海道など場所を変えながら制作活動を展開していった。その生涯を貫くのは土から作る製陶が多様な形で存続発展するための可能性を探ろうとした態度である。京都市立陶磁器試験場、満鉄などの素材研究や技術革新など時代が窯業をおしあげていった背景、そこでの科学者、技術研究者としての彼の側面と、これを支援、協働した関係者についての詳述部分は、京セラ、野村製作所など製陶を基盤としつつ、新しい技術の開発生産とビジネスについて論じた後半とあわせて本論の独自性として評価できる。

一方、他の副査諸氏の指摘にもあるように、「伝記」的な事実の時系列的な記述により、論理的な思考の枠組みが見えづらいこと、その論理性の基盤となる純粋芸術と応用芸術の概念定義が単純にすぎ、日本的な「芸術概念」の形成の歴史、および「純粋」と「応用」の間の独特の弁証法のあり方にまで検証が及んでいない点が指摘された。「芸術性」にまつわる言説の展開、分析記述の弱さは、産業の拮抗・併存をテーマとしている本論にとって問題といえる。

瀬戸の山茶窯において日根野作三についての言及の欠落（唐澤氏の指摘）や具体的な作品についてのデザイン性や意匠の美学について全般にわたる記述の不足は、今後の研究のなかで改善すべき点である。

とはいえ、脱西洋、脱植民地主義、経済、技術と、文化芸術産業の多様な関係の可能性を戦前戦後の大きな変化の中で、ドリフトするようにとらえ、展開した本論のダイナミズムと、従来になかった視点、関係性の構築は、今後の横断的な工芸と産業、技術史、文化史研究に貢献するものと評価できる。化学合成物質ではなく陶器や窯業を通しての土との繋がりを見直しは、現代思想の潮流の一つである新物質主義(000)への関心と関連しており、京都の先端の技術開発がデジタルデザインの美学に還流していくこととあわせて、現代的な問題意識とのつながりを見ることができるといえる。

指摘された問題は修正可能な範囲と判断でき、総合的に優れた論文と評価できる。以上、博士号授与に相応しい論文と評価し、審査結果を合格とする。